



日本現代文學全集 73

葉山嘉樹

徳永直集

黒島傳治

講談社

日本現代文學全集

73

葉山嘉樹・徳永直・黒島傳治集

編集

伊藤 整
龜井 勝一郎
中村 光夫
平野 謙
山本 健吉



初版 第1刷
昭和39年7月19日
増補改訂版 第1刷
昭和55年5月26日

著者 葉山嘉樹
徳永直
黒島傳治

装幀 蟹江征治

發行者 野間省一

發行所 株式會社 講談社

印刷 大日本印刷株式會社
製本 加藤製本株式會社

東京都文京區音羽 2-12-21

郵便番號 112

電話東京03 (945) 1111(大代表)

振替東京 8-3930

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

Printed in Japan

0395-106739-2253 (2)

(文1)

葉山嘉樹集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

海に生くる人々……………セ

淫賣婦……………二二

セメント樽の中の手紙……………二三

濁 流……………二三

作品解説……………平野 謙 三八

葉山嘉樹入門……………小田切秀雄 三六

年 譜……………三九三

参考文献……………四二

徳永 直集 目次

巻頭寫眞
筆 蹟

妻よねむれ……………二五

八年制……………三四

最初の記憶……………三七

あぶら照り……………三七

日本人サトウ……………三二

作品解説……………平野 謙 三八

徳永直入門……………小田切秀雄 三九

年 譜……………四〇

参考文献……………四三

黒島傳治集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

武裝せる市街……………六一

二錢銅貨……………六四

渦卷ける烏の群……………六六

作品解説……………平野 謙 六八

黒島傳治入門……………小田切秀雄 五一

年 譜……………四七

参考文献……………四四

葉山嘉樹集

医者が来る！

お、病氣、こ奴よ

手前はどんずにおいふを

苦しめたとか

手前の垢じみた尻び、擦るも

胃が痛くより 腸が

手足が 頭が 胸が



海に生くる人々

一

室蘭港が奥深く入り込んだ、その太平洋への灣口に、大黒島が控えている。雪は、北海道の全土を蔽うて地面から、雲までの厚さで横に降りまくった。

汽船萬壽丸は、その腹の中へ三千噸の石炭を詰め込んで、風雪の中を横濱へと進んだ。船は今大黒島をかわろうとしている。その島の彼方には大きな浪が打っている。萬壽丸はデッキまで沈んだその船體を、太平洋の怒濤の中へこわごわ覗いて見た。そして思い切つて、乗り出したのであつた。彼女がその臨月の體で走れる限りの速力が、ブリッジからエンジンへ命じられた。

冬期に於ける北海航路の天候は、いつでも非常に險惡であつた。安全な航海、愉快な航海は冬期に於ては北部海岸では不可能なことであつた。

萬壽丸甲板部の水夫達は、デッキに打ち上げる、ダイナマイトのような威力を持った波浪の飛沫と戦つて、甲板を洗つていた。ホースの尖端からは、沸騰點に近い熱湯が迸り出たが、それがデッキを五尺流れるうちには凍るのであつた。五人の水夫は熱湯の凍らぬ中に、その渾身の精力を集めて、石炭塊を掃きやつた。

萬壽丸は右手に北海道の山や、高原を眺めて走つた。雪は船と陸とをヴェールを以て遮つた。悲壯な北海道の吹雪は、マストに悲痛

な叫びを上げさせた。

生命のあらゆる危難の前に裸體となつて、地下數千尺で掘られた石炭は、數萬の炭坑労働者を踏み臺にして地上に上つて來た。そして、今、海上では同じく生命の赤裸々な危險に、その全身を船體と共に曝露しつゝある、船員の労働に依つて運送されるのであつた。

藤原六雄は、ランプ部屋へ入つて、ランプの掃除をしていた。彼は、今年二十八歳のひどくだまりやの、氣むずかしやであつた。そして、一體彼は何か仕事をしているのか、どうか疑わしいほど、労働が嫌いな性のように見えた。彼の職務は倉庫番であつた。

ランプ部屋はブリッジに向ひ合つて、水夫室と火夫室の間に、じめに、小さく拵えられてあつた。藤原はそこでランプのホヤを拭きながら、水夫達が、デッキを掃除しているのを見ていた。彼は此頃ボースンにも、一等運轉士にも見込みが悪いことを知つていた。「ストキ（倉庫番）にもワシデッキの時には手傳つて貰わなきゃならん。一萬噸も八千噸もある船とは異うんだからな」と、いつか水夫達全部が揃つて飯を食つてゐる時にボースンに云われたことがあつた。

「ふん、ストキとは倉庫番でことだ。倉庫番は倉庫の番さえてりや、それで澤山だろう」と、彼は答えた。

——それ以來、どうも、俺は水夫たちの仲間からまでも受けがよくない——と、淋しそうに、ストキは考えた。

二

船のエンジンはフルスピードをかけていたが、風と浪とで速力が全で出なかつた。未明に出帆したのに、夕方になつても未だ津輕海峡沖を抜け切らなかつた。

その夜、高等船員側では室蘭へ引きかえそうかとの相談も行われたが、それは實行されるには至らなかつた。

水夫達は、暴風雪がだん／＼猛烈になつて來るに連れて、その作

業も平常とは趣を異にし初めた。船體は保險マーク以上に沈んでいたので、充分に抵抗的であつて、波浪は一つも残らずデッキへと打ち上げた。そしてデッキは一面の海になつてしまつた。掬ひ込む水は仲々小さな排水口から急には出て行かなかつた。デッキには、ハッチの上を通るように、ライフライン（命綱）が張られた。いつデッキを通ろうと試みても、そこは外海と何等異なる處はないからであつた。浪はその山と山との間に船を挟んでしまふ。その谷になつた部分が船のヘッドから胴體へ進む時、次の山の部分がヘッドに打ち衝る。鐵製のわが萬壽丸も、この苦悶には堪えかねて、斷末魔の叫びを舉げる。ミリミリ、ドタンというなる。その谷がやがて、ともへ行くと推進器は空中で空回りをする。推進器は、飛行機のプロペラーのように空中で廻轉する。兇暴なその船の太さほどの猛獸のように吠える。特別裝置のないどの棚からも、いろんなものが落ちる。ランプのカップからランプが踊り出る、舵機は非常にその效力を減じられる。速力は今ではもう推進器の空轉の危險から、殆んど三哩位に減じられて、たゞ船首を風の方向から轉換しないようにのみ總ての努力を盡していた。

機關室の方も汽罐室の方も、非常な困難があつた。油差しは、動搖のために、機械と機械との狭い部分に入り込むのに、神祕的な注意を拂つた。火夫はその汽罐の前で、シヨベルを持つて、よろけまゝとして骨を折つた。

汽罐室の眞上のコック場では、コックが、いつも一度で炊く飯を五度位に分けて炊かねばならなかつたし、お菜も同様な方法にして猶、汁物は作るわけに行かなかつた。

コロッパス（石炭運び）は、石炭庫の中で、頭中を瘤だらけにするのを、どうしても免れるわけには行かなかつた。

水夫等は、デッキを洗う波浪からダンブル内への浸水を護るために、ハッチカバー（船艙の蔽い）や、それを押えた金具や、又その上から嚴重にロープを通して縛らねばならなかつた。それは危険な

作業であつた。そして此危険な作業なしには、此の船全體が危險から免れ得る方法がなかつた。恰も意地の悪い馬が馴れぬ乗手にするように、船體は猛烈にその背を振つた。そしてその毎に柄杓が水を掬うように、デッキは波浪を掬ひ込んだ。ロープは濡れて、固くなつて操作に非常な困難と遲滞とを招いた。然し夫は成し遂げなければならぬ仕事であつた。ハッチが水を飲むと云うことは、文句なしに、簡單明瞭に船體の沈没を意味するものであつた。五人の水夫と、ボースンと、ストキと、大工との八人が總動員で、此仕事を遂げた。

彼等はその體が、そのまゝ凍るような風の下に、メスのように光る、そして痛い波浪に刺された。そしてそれは、餘り動かない部分をカン／＼に凍らせた。

船體の危險と、船體と共にする自分自身の危險と、そして、觀面に自分の凍えんとする肉體に對する危險とは、火事が中風の婆さんに、石臼を屋外まで抱え出させるほどの目覺しい、超人間的な活動を、水夫達に與えた。そして、船首のハッチ二つは完全にその防備が出来上つた。

未だ二つのハッチが船尾の方に残つていた。そして、時間は今夕食に迫つていた。水夫たちは、飢えを感じた。けれども、海も飢えを感じて、わが萬壽丸を呑もうとしていたのであつた。

船は絶えず藻掻き、マストは絶えず悲鳴を上げ、リギンは絶えず恐怖に叫んだ。船首の船底は、波浪と決闘するように打ち合つた。船尾ではプロペラーが、その手を空に振り上げた。

自然と人力とはその最大の力と、あらゆる智慧とを以て戰闘した。

三

船を一廓として、人間と機械とが完全に協力して、自然と戰つてゐる時に、船員たちは、自分たちが、船のりであることを、此時以上に癪に障り、心細くなり、哀れに氣の滅入ることはなかつた。そ

して彼等は、あらゆる瞬間の極度の緊張と、注意にも拘らず、自分の運命を哀れむのであつた。彼等は、眞つ暗な闇の中を電光が一時に、全く鮮明にパツと明るく照らす様に、此困難な労働の間に、感ずる處の彼等の地位は、全くハッキリした賃銀労働者の正體であつた。然し、それは電光と全く同じであつた。彼等は、すぐ、その仕事の方へと一切の注意を向けねばならなかつた。

水夫等は、船首の方を濟まして、船尾のハッチへ行くために、サロンドッキに上つた時であつた。ブリッジにいたコーターマスターの小倉が、何か分らぬことを、體中で怒鳴りながら、物凄い勢いでブリッジから飛び下りて来て、サロンドッキを艫の方へかけて行つて、そのタラップをまた飛び下りた。

セイラーたちは、ビクリとしたのみならず、コック場のコックやボーイや交替で休んでいた機關長や、ブリッジの上の船長やは、全部が小倉の飛んでつた行方を見守つた。

小倉は、船尾へ駆けつけた。そこには、ブリッジから操るスチームギア（蒸氣舵機）の鎖と、そのカバーとの間に、わざとのように、水夫見習が、右半身をうつ伏しに潜り込ませていたのであつた。

小倉は、水夫見習が樂に出るようと思つたのであつたが、然し舵機は同位に船首を保つために、一刻も放擲しては置けなかつた。

そこへ水夫等は全部かけつけた。あるものは、カバーの金板をバールで動かそうと試みた。此間にも波浪は、船首甲板ほどではないにしても三四度、此處を洗つた。

水夫全體の力と小倉との力は水夫見習を、鎖とカバーの間から引張り出すことができた。けれども見習は、引きずり上げられた溺死體のようにだらりとして、眼ばかりを宙につつていた。彼は直ちに、水夫二人に擔がれて、最も震動と、轟音との甚しい船首の、彼の南京蟲だらけの巢へ連れ込まれた。

仕事着を彼から脱がせることは最大の急務であつた。が同時に最

大の困難でもあつた。まるで帆布作りの仕事着でもあるように、それは凍りついていたのである。ついて來た藤原は、その腰のメスを抜いて見習の仕事着を上手に切り裂いた。そして、彼の寢間着が、上にかけられた。

ボーイ長の右手と右の部分に紫褐色の打撲傷が出來ていた。そして左足の拇指が碎けていた。

ストーブがいないために、水夫等は甚しく寒かつた。見習は、傷と、凍のために、若し此のまゝにして置くならば、必ず、始末は早くつくこと云うことを皆知つていた。そこでついて來たストキと、水夫二人は各水夫の巢から、ありつたけの毛布を集めて、それをかけてやつた。

そして、そのまゝ、全部彼等は船尾ハッチのカバー作業に駆けて行つた。

船尾のハッチは船首のそれと同様の危険と困難さをもつて、作業された。手の屈きそうな低空を、雪雲が横飛びに飛んだ。中に、濃い雪雲は、マストに引つかゝつてそれを抜いてでも行くかのように、はげしくマストを揺ぶつた。水平線は、頭上遙に昇るかと思うと、足下深く沈んだ。（船の動揺は、同時に水平線を動かすものだ。）ボーイ長（水夫見習を云う）の運命は、全甲板労働者の現在のすぐ背後に饑のように迫つていたのであつた。

船尾部分のハッチは此上もなく嚴密に密閉された。そして、次のは、機關室と、その上部に在る士官室、サロンドッキとの蔭になつていたために、以前の三つに比較べて、作業は樂であつた。そこで、藤原は、ランプを燈す準備をするために、再び「おもて」（船首部分）へ歸つて行つた。

ランプ部屋へ入る前に、彼は先ず水夫室へ入つた。未だ十七歳の少年、水夫見習は、痛さに堪えかねて、「お母様、おとうさん」と、両親を叫び求めては、泣いていた。そして、暫く息を詰めて、死のような沈黙の中へ落ちて行くのだつた。藤原は、ボーイ長の寢床

の端板に凭れかゝつて、ボーイ長の顔を覗き込んだ。けれども、見えなかつた。一つの窓も開けられていない水夫室は、出入口から星の夜のような光が辛うじて這い込み得ただけであつた。殊にボーイ長のは二層床の下部に當り、光の方を背にしていたので、最も暗かつた。藤原は、自分の床から蠟燭をとつて、ボーイ長の枕下に立てた。彼は白ペンキのやうに青ざめて、そしてくらげのやうに衰えていた。

未だ、チーフメートは、何等の手當もしには來なかつた。

彼は、ボーイ長を慰めた。そして直ぐにチーフメートが「膏藥」を持つて、のろ／＼來やがるだろう、奴等には、勞働者よりも、ブロックの方が比較にならぬほど重大なんだ、然し、心配しないがい、皆がついてゐるからと云つて、ランプ部屋へ支度に行つた。

萬壽丸は尻屋岬燈臺沖にかゝつた。暴化は其勢を少しも收めなかつた。

水夫等はボートやサンバンを吹き飛ばされないように、それを、より一層殆んど、吹き出し度い位に、頑丈に、これでは沈没した時に決して間に合わない、と證據立てられるほど、それほど頑丈に、くど／＼とデッキや煙突にまで、綱を引つ張つた。そして、此の仕事は、波浪の恐れは全然なかつたが、動揺と、風と、おまけに「てすり」がないので、海へ落ちると云う危険を伴つた。ボートデッキは、船中で一番高い部分であつて、それは士官室の屋根と天井とを兼ねていた。

水夫達は、一本のロープを持つて、ボートの下へ仰向けに潜り込んだり、ボートの外側——そこはデッキ板一枚の幅しかなくて、海面まで一直線にサイドなのだ——に、今縛りつける、そのボートに擱つて綱をからげるために、サイドへ足を踏ん張つて、海の方へ體を傾けたりした。

ボースンは、直ぐ前のブリッジから、船長が作業を見ていたために、その禿げた頭を、章魚のやうに赤くして慌てたり、怒鳴つた

り、焦つたりした。

四

陰鬱な薄暗がり、海上に這い出たために、右舷に尻屋岬の燈臺が感傷的に瞬き初めた。荒れに荒れる海上に、燈臺の光を眺むるほど、人の心を感傷的にするものはない。此海の上は、今にも我々の命を奪おうとする程暴れ、喚いてゐる。そして、我々の家は宙天から地底へまで揺れ轉ぶ。そこには火もなく、灯さえもない。だのに、あそこには燈臺が光る。その燈臺は、確りと地上に立つていて、そこには家族がある。團欒がある。愛すべき子供がある。いとし妻がある。そこには火鉢があるだろう。鐵瓶がかゝつてゐるだろう。正月の用意の餅が掲げてあるだろう。子供がそれをねだつてゐるであろう。「もうねんねするんです。ね、夜食べると、ボンボンいたいですよ。サ、ねんね」と、母は今年三つになつた子供を膝の上に抱き上げるだろう。そうして、可愛くて堪らぬと云つた風に、子供の頬にキスするだろう。そうして、夫と顔を見合せて微笑むだろう。そして、「明日は又随分澤山鳥が落ちてくることでしょね。こんなにしけるんだもの。鳥だつて船だつて敵いませんわね」と、云つて、火鉢から鐵瓶を卸して、茶でも入れるだろう。そして、子供に隠して、その父から一枚の煎餅を出して貰つて「坊やはいいい子ね、サ、お菓子」と云つて出し抜けに子供にそれを與えるだろう。

だのに、俺達は、凍えるような風と、メスのような浪と、雪のやうに冷たい資本家や、水のやうに冷酷な船長の下で、勞働をしてゐるんだ。俺は何だつて船員になんぞなつたんだらう。

殊に家持ちの下級船員はそうであつた。彼等は、そうでなくてはさへも、その家庭に堪らなく曳きつけられてゐるのに、暴化のときには、その心持は長い刑を言い渡された囚人が、その家族のことを身も心も瘡せ碎けるやうに戀い慕い、氣遣うのと異なる處がなかつ

た。全く、今では、兩舷から、鯨油を流してさえている位であつたから。鯨油を流すことは、暴化も甚しくならないとやらないことであつた。

尻屋の燈臺はセンチメンタルに瞬く。日は暮れかけて、闇は、波と波との谷間から煙のように忍び出しては、白い波浪の飛沫に、蹴飛ばされていった。

舵手の小倉は、船首を風位から變えないように、そのあらゆる努力を傾注していた。彼の眼はコムパスと、船の行方とを、機械的に注視していた。

と、本船の前左舷遙かな沖合に、一艘の汽船が見えた。「あ、汽船が！」と、小倉は無意識に叫んだ。

船長もチーフメイトも誰もがブリッジの左舷へ集つて、望遠鏡のレンズを向けた。

此少し前から、ポートデッキで、サンパンの下にもぐり込んで仕事していた、水夫の波田^{はだ}芳夫と云うのも、今小倉が見付けたのを見付けて、一人でサンパンの下から眺めていたのであつた。

ブリッジでは望遠鏡があるために、其汽船は救助信號を掲げて、難破漂流しつゝあるものであることが分つた。

ブリッジからは、直ちにエンジンへ向けて、フルスピードを命令した。一つ救助に出かけようとするのであつた。

全乗組員は難破船が見えると、その救助に向うことを直ちに知つてしまつた。そして、全員はポートデッキへスタンバイした。

わが勇敢な、然も自分も腹半分水を飲んだ半溺死人のような、萬壽丸は、その臨月の體で、目的の難破船に、僅かに船首を向けた。極めて、それは僅かの程度であつた。が、本船はグーッと傾いた。

そして見る見る中に、その舵が向いても居ないうちに拘らず、グン／＼その頭を振り初めた。そして、同時に物凄う怒濤が、船首、船尾の全部を呑もうとするように打ち上げて來た。

船長は、今云つた許りであつたにも拘らず、方位を元へ返した。

本船は極めて短い五分とかゝらぬ間に、殆んどコースを半回轉しやうとしたのであつた。

難破船の稍近くへ近づくことは能きたが、本船はその船首を非常な努力の下に従前通りの位置に返してしまつた。

難破船を救うと云うことは、本船を一緒に沈める計畫になると云うので、船首はもうその向きを換へなかつた。けれども哀れな兄弟たちの乗り込んでゐる妹の難破船は、段々我々の視野に大きく明瞭に入る様になつた。我々は、今のコースを以て進むならば、四哩位の側を通過するであらう。

波田は、サンパンの下から這い出して猶も一生懸命に、煙突にもたれて、寒さと、掴み處を同時に得ながら見入つていた。狂犬の口を蔽う泡のような怖ろしい波浪と、此夕暗とに、あの船は吞まれてしまふんだ。彼は自分が二度も沈没に際會した時の事を思い浮べては、その難破船に射込むような眼を投げていた。

その小さな五百噸位の小蒸汽船は、北海道沿岸廻りの船らしかつた。今やその煙筒からは燃え残りの煙草程の煙も出ていなかった。汽罐に浸水したのはもうずつと早いことだつたらう。そのマストの下の方には、棧橋に流れかゝつたぼろ布のような帆布が、まといつてゐた。汽罐に浸水してから、どこかのカバーでも外してマストに縛りつけたものであらう。僅かにデッキの上でバタ／＼と、その切れつ端が洗濯したおしめのように振れてゐた。

それにしても船員は、ブリッジにも、マストにも、デッキにも、どこにも見えなかつた。津輕海峡を越す時に命を捨てて、ポートでも本船を捨てたのであつたのかも知れない、又は、その各々の室に凍えた體を、動搖のまゝに、お互に打つ衝け合つたり、追つかけ合つたりして、樂しみのなかつた生前の勞働者の運命を呪ひ悲しんでいるのかも知れない。然し、この暴化はそれほど長く續いた譯でもなかつた。本船出帆の前日が其最高潮であつたのだから未だ二晝夜しか経つてゐない。船員は、或は、一室に集つて、別れのための

最後の貧しい食事でもしているのかも知れない。

「あゝ、俺は二度まで沈没船に乗っていた。一度は胴つ腹を乗り切られ、一度は衝突だつた。が、どちらも瀬戸内海で、一度は春の末、一度は眞夏であつた。そして、そのどちらの時も救われた。けれども、北海道の冬の海では逆も助りつこはあるまい。俺は、瀬戸内海で沈められた時に、海の中に飛び込みざま『助けてくれ』と怒鳴つた悲鳴を今でも思い出せる。その叫びを擧げる刹那は全く、ありとあらゆる記憶、あらゆる感じ、それ等のものが、一度に總勘定でもするように頭に浮んで來た。そして、『十八では未だ死ぬのに、二年早すぎる』と、俺は思つた。何で二年早すぎたのか自分でも分らない。けれどもハッキリ自分は二年早すぎたと思つた。お、お！もし、あの船の人たちが、死んだとすれば、皆俺と同じ感じを抱いて死んだことだろう。死ぬのには、人間は何歳になつても二年早すぎるのだと、自分は此頃考えるようになったが、全く、どの位多くの人が二年宛^づ早く死んで行くことだろう。それにしても、此船長は何と云う冷酷、殘忍な奴だろう。僅か四哩や五哩より離れていないのに、その最後を見届けようとしれないとは。自分の悦樂のために此船長は俺達の生命を、いつでも鱈の前に投げてやるだろうに。俺は、その沈没船に代つてでも、又、この船員たちのために、船長と闘う時が必ず來ると信ずる」と、波田は考えに耽つた。

難破船は益々近づいた。日は暮れたけれども、未だ夕明りである。船は、今ならば、もつと難破船へ近附くことが能きるのであつた。が、わが、勇敢な萬壽丸は船員全體の希望にも拘らず、船長の一言によつて、冷やかに姉妹の死を見捨てて去ることになつた。そして、本船には、救助不能の信號が揚げられた。相手へ知らせたためではなく、乗組船員を胡魔化し、同時に海事日誌を胡魔化するための。

實際、此時暴化は段々風いで來たのであつた。船員は一時間前の勇敢なる船長の行動を不審に思うのであつた。

その可愛い小柄な船は四十五度以上五十度近く傾いて、今にもそ

のまゝ、沈み行きそうに見えた。そして人はどこにも見えなかつた。甲板の上は見事に掃除されて、その掃除手の怒濤は、僅かに甲板の隅に凍りついて残っているのみであつた。マストのカンバス（帆布）は、ハッチの上部カバーであつた。それは全く淋しい姿であつた。火のない船であつた。人の居ない船であつた。生命のない捨てられた世界であつた。われ／＼は皆サロンデッキに並んで、浪と運命を共にするであらう、その船に別れを告げた。誰の心にも黒い、寒い寂寥が蝕食つた。

これは、やがて、わが萬壽丸の運命でもあつた。われ等が、船底に飢えと寒さとに倒れて漂流する時に、も少し大きな船が又、われ等の傍を通るであらう。われ等は信號を掲げねばならぬことを知つてゐるだろう。又われ等は、人間がその船室に凍えかけていることを、知らせる必要があることを知つてゐるであらう。それにも拘らず、誰も甲板に出ないであらう。出られないのだ。途中で仆^{たふ}れてしまふのだ。

そして、漸く、最後の一人がデッキへ這い出た時には、今汽笛を鳴らして通つた船は、浮べる一大不夜城の壯觀を見せて、三哩も行き過ぎてゐるであらう。

このようにして、わが萬壽丸は汽笛を鳴らして通過した。その汽笛を微に聞いて、今立ち上ろうとして、その凍えた體に最後の努力と藻掻きとを試みている兄弟が、その船の中に居ないだろうか、その頼りない捨てられた犬の子のように哀れな形をした船の中に。

鐘が鳴つた。夕食である。水夫は水夫室に、火夫は火夫室に、各々入つて行つた。

難破船は、薄闇の中に、暴れ狂う怒濤の中に、傳奇小説の中で語られた悲しき運命の船の如くに、とり残された。

藤原は、船尾にランプを吊り上げながら、残された船を見送つて、堪えられない寂しさと、憤^{いらい}とに心を燃した。

「あの船には、尠くとも二十人の乗組員はあつただらう。それが養

つてゐる、同じ數位の家族もあつただろう。あの中で二十人は凍死したか、ボートで溺死したか、どちらにしても彼の船の乗組員が助かると云ふことは考えられないことだ。二十人は遂々、その家族を残して、妻子はその主人に残されて逝つてしまわれたんだ。そして、その船に依つて、最も重大な利害を感じる筈の船主は、今その宅で雪見酒を飲んでゐるのであらう。その二十人の不拂労働から、蓄めて經營してゐる會社の株のことを、電報が入ると直ぐに氣にするだろう。遺族には、香典が二十圓宛位は行くであらう。そして、船主は、二十人の人間のことよりも、その沈没するのが當然なほど腐朽し切つた、ぼろ船の運命に對して、高利貸式の執拗さで口惜しがつてゐるだろう」

「人間が生きて行くためには、どうしても人間の生命を失わねば生きて行けないのか、人柱！ 俺達は皆人柱なんだ！」

五

水夫室では、水夫達が、大ところが唸り合いながら食べると同じように、騒ぎながら、夕飯を食つてゐた。

負傷したボーイ長の側には、藤原と、波田とが居た。波田のベッドは、ボーイ長のとし字形に隣合つてゐるので、自分のベッドで、頭をかぶめながら、うまい夕食を攝つた。全く、字義通りに「喉から手が出る」程であつた。胃の腑へ届く食物は、そのまゝ直ちに消化されて、血管を少女のような元氣さと華かさとして驅け廻るように感じられた。彼は飯を口一杯に頬張りながら、ボーイ長の足許に波田と並んで、これを頬張つてゐる藤原に話しかけた。

「チーフメートは來たかい」

「未だだよ」藤原は、全でそれが波田のせいでありでもするかの様に、膨れつ面をもつて、答えた。

「随分無責任じゃないか。三時間も打つ捨らかしとくなんて」

「距離が遠いんだよ。距離が、奴等のはね」藤原は謎の様に云つた、

「ハ、ハ、ハ、なるほどね、サロンから、おもてまでじや三時間じや來られねえや」波田は、冗談だと思つて笑つた。

「五感と、神經中樞との距離がき。鼻と口との距離と同じ程なんだよ」

ストキはひどく憤慨してゐるように見えた。

「それに、こう云ふことに馴れて、無神經になるつてことは、それが仲間のことであると、なおさら善くないね」

藤原は、話がむずかしいので、有名であつた。彼は漢語見たいなもの——仲間の間でそう云つた——を使ひたがる癖が骨に沁み込んでゐるのであつた。

未だ食事が、始められて間もなく、チーフメートは、ボーイに「救急箱」を持たせて、「大急ぎ」で驅け込んで來た。

水夫達は食事を中止した。そして、水夫見習のベッドを、チーフメートと一緒にとり卷いた。

「ボースン！ こんなに暗くちや何も分らんじやないか、蠟燭をつけて來い。五六本——と、チーフメートは一發放した。

かくて、蠟燭はつけられた。ボーイ長がそこへ寢始めてから、三時間目に初めて、彼の室は燈で照らされた。彼が船へ持つて來たものは、その體と、その切り捨てられた仕事着と、初期の禿頭病とだけであつた。

彼は、陸上でひどく苦しんだ。彼の家はひどく貧乏の上に、兄弟が十一人もあつた。彼は、小さい時分から、自分を養うのは自分でなければならぬことを感じさせられて來たのであつた。

彼は、訴えるような目附きで、又、彼のそのような負傷にも拘らず、チーフメートに直接物を言うことを恐れて、遠慮勝ちに「痛あい」と呻いた。

チーフメートは何でも構わず、ボーイ長の左半身全體に、イヒチオイルを塗りまくつた。彼は一分間でも早く彼の義務が終ればいいのであつた。醫者のやる様なことが、彼の義務であることも癪に障

ることであつたが、それは、彼がそれでパンを得ている以上、仕方のない災難なのであつた。彼は、彼もパンのために、そのいやな仕事を持つてゐることを知ると同時に、もつと悪い條件の下にパンを求めてゐるものがあり、それが「おもてのならずもの」でもあることを知らねばならない筈であつた。ところが、彼は、ブルジョア等とを區別してゐた。「俺は紳士だが、奴等は労働者だ」或はもつと正確には「俺は人間だが、奴等はセーラーだ」と。

チーフメートは、限りなき嫌惡の情を含みながら、ボーイ長を滅茶苦茶に、イヒチオールで塗りまくることを、(面倒臭い餘りに、そうするのではない)と云う風にセーラーたちに見せたかつた。彼は爲なければならぬことの形式だけをやつて、然も感謝の念をセーラー達から盗もうとさえ企んだのであつた。

黒川鐵男、これがチーフメートであつた。黒川は、イヒチオールを塗りまくる間に、口をきくことは、それほど仕事の能率を妨げないし、又、それ以上仕事を、汚くも困難にもしないと考へた。そして、彼がどんなに、此の「蟲けら」のようなボーイ長に對してさえ、人道的であるかを見せようといふ。と彼は考へた。

「おもては全く、寒いね、そしてまるで眞暗じやないか」と黒川は口を切つた。彼はボーイ長の胸部にイヒチオールを塗布しながら云つた。

「満船の時はどうも仕方がありません」と、ボースンは鞠躬こうぶつ如ごととして答へた。全て、全て、寒くて、暗くて、汚くて、狭いのは、ボースン自身の罪でもあるように。

「これじやいくらお前等でも堪らないなあ」「なかに、メートさん、新造船だから、いい方ですよ」とボースンは答へた。

「暗くて寒いことあ今始まつたこつちやないや、おまけに風呂だつてありやしない、これでもおれ等は、人間並は、人間並なかい」

と藤原が後ろから、燃えるような毒舌を打つつけた。

チーフメートは早速方向轉換の必要を痛感した。

「ボーイ長の傷は存外軽くてすんだね。俺はもうとても駄目だと思つていたんだよ、命拾ひしたわけだね」

「そうさ、すぐたばりやもつと傷が軽いわけさ、手がかゝらねえからな」又藤原が口を出した。

セーラーたちは、何か起りはしないかと内心好奇心に驅られて「事」の起るのを待つてゐた。

「黙つてろ！ 餘計な口を叩くな！」チーフメートは遂々爆發した。

「黙つてろ？ 黙るさ、だが、手前等にや手前等の命は大切でも、人間の命が、どの位大切かつてことは分る時はあるまいよ。ヘッ」

藤原はそのまゝ自分の巢へ上つて、煙草に火をつけた。彼は明白にチーフメートに挑戦した。

戦争はすぐ開かれるか、後で開かれるか、どんな形に於て開かれるか、それは水夫等全體を昂奮の極に追ひ上げた。

黒川一等運轉手は彼の策戦が失敗したことを承認した。そして、多分此事はこれだけで片がつかないだろうと、云うことも分つた。

長びくような事件にならねばよいかと彼は心配してゐた。特にそれは、此場合では、彼にとつて絶対に都合のわるいことであつた。彼は、黙つて、早く手當を濟ますに限ると思つたので、その手當を急いだ。

かくして、イヒチオールはそれが、その本來塗らるべき處であらうと、又は、傷をなして赤い肉の出た處であらうと、出血してゐる處であらうと、お構ひなしに塗りたくられた。又、如何なることが起きて、起らなくても、ボーイ長の左半身全體を眞黒くすると云うことは、彼の三時間に互る熟慮の結果であつた。

そしてチーフメート黒川鐵男は、そのプログラムに従つて他意なくやつてのけた。何等親身な情からでもなく人間的な氣持からでも